

十兵衛感応寺にいたりて朗圓上人に見え、涙ながらに辞退の旨云ふて帰りし其日の味気無さ、煙草のむだけの気も動かすに力無く、茫然としてつくづく我が身の薄命、浮世の渡りぐるしき事など思ひ廻せば思ひ廻すほど嬉しからず、時刻になりて食ふ飯の味が今更異なるではなけれど、箸持つ手さへ躊躇ひ勝にて舌が美味うは受けとらぬに、平常は六碗七碗を快う喫ひしも僅に一碗二碗で終へ、茶ばかり却つて多く飲むも、心に不悦の有る人の免れ難き慣例なり。

主人が浮かねば女房も、何の罪なき頑要ざかりの猪之まで自然と浮き立たず、淋しき貧家のいと淋しく、希望も無ければ快樂も一点あらで日を暮らし、暖味のない夢に物寂た夜を明かしけるが、お浪暁あかの鐘に眼覚めて猪之と一所に寐たる床より密と出るも、朝風の寒いに火の無い中から起すまじ、も少し睡させて置かうとの慈しき親の心なるに、何も彼も知らいでたわい無く寐て居し平生とは違ひ、如何せしことやら忽ち飛び起き、襦袢一つで夜具の上跳ね廻り跳ね廻り、厭ぢやい厭ぢやい、父様を打つちや厭ぢやい、と蕨のやうな手を眼にあて、何かは知らず泣き出せば、ゑゝこれ猪之は何したもので、と吃驚しながら抱き止むるに抱かれながらも猶泣き止まず。誰も父様を打ちは仕ませぬ、夢でも見たか、それそこに父様はまだ寐て居らるゝ、と顔を押向け知らずれば不思議さうに覗き込で、漸く安心しは仕てもまだ疑惑の晴れぬ様子。

猪之や何にも有りはし無いは、夢を見たのぢや、さあ寒いに風邪をひいてはなりません、床に這入つて寐て居るがよい、と引き倒すやうにして横にならせ、搔卷かけて隙間無きやう上から押しつけ遣る母の顔を見ながら眼をぱつちり、あゝ怖かつた、今他所の怖い人が。おゝおゝ、如何か仕ましたか。大きな大きな鉄槌で、黙つて坐つて居る父様の、頭を打つて幾度も打つて、頭が半分砕けたので坊は大変吃驚した。ゑゝ鶴亀鶴亀、厭なこと、延喜でも無いことを云ふ、と眉を皺むる折も折、戸外を通る納豆売りの戦へ声に覚えある奴が、ちエツ忌々しい草鞋が切れた、と打独語ぎて行き過ぐるに女房ますます気色を悪くし、台所に出て釜の下を焚きつくれば思ふ如く燃えざる薪も腹立しく、引窓の滑よく明かぬも今更のやうに焦れつたく、嗚呼何となく厭な日と思ふも心からぞとは知りながら、猶気になる事のみ気にすればにや多けれど、また云ひ出さば笑はれむと自分で呵つて平日よりは笑顔をつくり言葉にも活気をもたせ、澆々として夫をあしらひ子をあしらへど、根が態とせし偽飾なれば却つて笑ひの尻声が憂愁の響きを遣して去る光景の悲しげなるところへ、十兵衛殿お宅か、と押柄に大人びた口きゝながら這入り来る小坊主、高慢にちよこんと上り込み、御用あるにつき直と来られべしと前後無しの棒口上。

お浪も不審、十兵衛も分らぬことに思へども辞みもならねば、既感応寺の門くゞるさへ無益しくは考へつゝも、何御用ぞと行つて問へば、天地顛倒こりや何ぢや、夢か現か真実か、圓道右に爲右衛門左に朗圓上人中央に坐したまふて、圓道言葉おごそかに、此度建立なるところの生雲塔の一切工事川越源太に任せられべき筈のところ、方丈思しめし寄らるゝことあり格別の御詮議例外の御慈悲をもつて、十兵衛其方に確と御任せ相成る、辞退の儀は決して無用なり、早々ありがたく御受申せ、と云ひ渡さるゝそれさへあるに、上人皺枯れたる御声にて、これ十兵衛よ、思ふ存分仕途げて見い、好う仕上らば嬉しいぞよ、と荷担に飾る冥加の御言葉。のつそりハツと俯伏せしまゝ五体を濡と動がして、十兵衛めが生命はさ、さ、さし出します、と云ひし限り喉塞がりて言語絶え、岑閑とせし広座敷に何をか語る呼吸の響き幽にしてまた人の耳に徹しぬ。